

# 「予防教育」注目集まる

学校不適応や生活習慣病など、心や体の問題を抱える子どもの増加を防ぐ「予防教育」が県内でも注目を集めつつある。鳴門教育大学は昨年、予防教育科学教育研究センターを開発。独自の教育プログラムを開発し、県内の一部の小中高校とともに効果的な予防教育の在り方を模索している。

研究センターでは、臨床的。暴力やいじめ、不登校、発達心理士や精神医学者ら、校、生活習慣病予防など専門家16人が予防教育プログラムを企画。各校の希望プログラム開発に携わっている。心身に個別に授業を組み立

## 心や体の健康 テーマに授業



心の健康をテーマにした予防教育の授業で将来の夢を発表し合う児童。鳴門教育大付属小学校

### 鳴教大、プログラム開発 小中高校と連携 効果検証

2009年度は県内6校で行った。

鳴門教育大付属小では、5年生の3クラスが心の健康をテーマに、各クラス計6回の授業を受けた。問題行動は、感情のコントロールやコミュニケーション能力が不足している子どもも出るといわれる。授業の主眼は自分のことを知り、相手を認めることから始めた。

5年2組は2月の授業で、20年後の目標を発表し合った。「自分らしさ」を確認するには夢を語るが一番だという。授業は児童同士の話し合いが中心。討論の中で子どもたちに表現方法や感情の制御法を身に付けさせていく。

研究センターはプログラムの効果を測る調査も実施。「自信を持って自分のことを話せますか」といった設問が並んだアンケートを基に、専門家が効果を検証していく。

デザイナーになる夢を語った中本瀬莉菜さん(11)は「自分の夢を初めて人に話した。恥ずかしかったけど、友だちの励ましに勇気がわいた」と笑顔を見せ

た。予防教育が欠かせない。科目教育と同じように取り組む必要がある」と指摘する。

一方、課題も浮き彫りになってきた。予防教育が本格的に始まって日が浅いため、とりわけ心の問題については、テーマの蓄積が足りない。このため、プログラムの効果測定は科学的な裏付けが十分とはいえない部分もあり、改良の余地があるという。センターでは今回の取り組みを基に、今後も各校と連携してプログラムを改善し、予防教育の普及に努める方針だ。

研究センターの山崎勝之所長は「健康な生活を送るためには、小さなころから、効果の大きい指導法の開発を目指している。「キレる」子どもや生活習慣病予備軍の子ども増加は一部の学校の問題ではない。心や体の問題は、すべての子どもにも発生する可能性がある」と山崎所長。不登校や保健委員会などの対処に人や時間をかける学校も少なくないという。

#### 記者の目

#### 取り組みの行方注視

「外で遊びまじよう」「好き嫌いをなく食べまじよう」。こうした生活指導は、県内の小中高校でも当たり前のように行われている。これも一種の予防教育だが、実行すればどんな結果が得られるかあいまいで、根拠に基づいた指導とはいえない。鳴教大を中心とした予防教育は、プログラムの効果を専門家が随時検証する。心の分野も含め、生活指導を「科学」にまで高めることで、子どもたちにとって、より受け入れやすい(地方部・大野真珠)

教育クラブ